



人口が市内で最も多かった港区

港区は大正14(1925)年4月1日、旧西区と旧北区から分かれて誕生しました。それまでの大阪市は、現在の市域の4分の1の面積しかなく、東・西・南・北の4区だけでしたが、この日に周辺の44の町村を編入し、面積は3倍に、区の数も13となりました。

創設当時の港区は、現在の大正区

や西区九条地区を含み、面積17.6平方キロメートルで全市13区中、4番目の広さでしたが、人口は約26万8千人であり、13区で最大でした。以後、区の人口は激増し、昭和5(1930)年には約36万人余りに達しました。



昭和初期の安治川河口の風景。
倉庫などがびっしりと並んでいます。



昭和初期のまち並み(港住吉神社の祭の様子、昭和10年頃)

昭和7(1932)年、大阪市は15区となり、港区のうち尻無川を隔てた区域が大正区として分割されました。分区後の港区は面積9.3平方キロメートルと、ほぼ半分になりましたが、人口は約28万4千人あり、やはり15区で最大でした。

戦時下の昭和18(1943)年、大阪市は22区となり、このときに港区は境川運河から東の九条地区を西区へ分割し、現在と同じ区域になりました。それでもなお、人口は約25万6千人で、22区中最大でした。

しかし、昭和20(1945)年の大阪大空襲で、港区は市内で最も被害の大きな地域となりました。終戦後、同年11月の人口調査では、実に8,672人という、まさに壊滅的な状況でした。

戦後、台風などの被害をこうむりながらも復興を遂げ、昭和40(1965)年に約11万6千人と戦後のピークを迎えましたが、その後は減少に転じ、最近の数年間では約8万3千人台でほぼ横ばいとなっています。

(写真は郷土出版社刊「目で見る大阪市の100年」より)